

## 行ってみなけりゃわからないドイツ <続編>

2015.9.3 中間一範



### ＝前編の補足＝

まずは前回の記載内容の補足。その後新たに目にしたことを2点ほど記すと、一つがトイレ利用で、とある図書館に入ったところ、鍵が掛かっている入れないので使用不可かを窓口で聞いてみると、カウンター上の小箱に男女区別の専用キーが置いてあり、身なりを見ながらの眼で、「これを使え」と指差しもらった。

利用後、戸締りして礼を言って返却すると、「どういたしまして」のにっこり答えて、図書館でのトイレキー貸し出しを知った。

もう一つは、かの日本製ウォシュレット。メッセを覗いた折り実物が展示してあり、ここではドイツ人のみのスタッフでパンフレット類もあったが、誰ひとりとして立ち寄っていない淋しい状景を眼にし、ドイツ国民へはまだまだ普及には時間がかかるのかなと思った。



ちなみに携帯電話のことに触れると、

10年ぐらい前のことであるが、ドイツ人は、これを持ったとしても電話とメール以外は機能上必要がない、「無駄」との考えが大半で、携帯所持者が少なかったが、初期機種 of 経年衰退で、今じゃ街中のショッピングセンターには、携帯電話とメールに情報検索機能内蔵のスマートホンはおろか、iPadやIT満載のタブレットの販売専門店が目につき、電車内でもあっちこっちの男女

が、これらに夢中で手に目にしての普及連鎖のオンパレードで様変わりが著しい。

### ＝改めてのドイツ人の気質＝

はじめに理屈ありきで、誰であろうと態度や決定が理屈に合っていないと思った時には文句を言わないで黙っていると、相手に同意したととられてしまう。

自分の都合だけでものを考えず、周囲に気を配ることが美德とされ、尊重される国 日本、この社会から180°異なる「自分本位性」の国 ドイツ。ドイツ人はみんなとにかく自分の立場を主張するのがうまい。理屈で相手を説得できたものが勝なのだ。

日本では、特に年上の人に対して話し合いの中で理由を聞くと、批判をしていると勘違いされて相手が気分を害してしまうことがあるが、ドイツの会話では、だれかれ構わず相手に理由を尋ねることは当たり前で、それもなるべく公の場で不満や意見をさらけだして、素直に問題点を話し合おうとする傾向が日本よりは強く、そのまま泣き寝入りで相手に対して何かを根に持つという日本独特の感情は少ないと云われる。

多くのドイツ人は、個人的な感情を交えずに客観的に議論しようとするので、意見が食い違うことをそれほど恐れない。むしろ違う意見を対立させることによって、新しい考え方を生み出そうという国民性である。

## ＝多種多様な交通の仕組み、利用者への情報の伝達＝

ここフランクフルトの交通網であるが、前回に触れた市内域網①（25km 圏相当ぐらいか）は、地下鉄（Uバーン8系統）と近距離鉄（Sバー9系統）は中央駅を絡めた南駅を起点にして、郊外地では地上鉄としたつくりで、これらを取り囲む形で市電〈トラム〉（T21系統）と市バス（B62系統）がネット状にある。

路線が豊富で、特にS発着駅は、行き先と途中停車の主要都市名が明示されて旅程の利用策が容易である



地下鉄 U、近距離鉄 S の駅の行先案内の掲示は、駅入り口に U、S の案内、U ホーム内には各系統の全区間駅名の案内表示（当駅には黄色被せ）〈photoE〉、S 構内にはホームと行き先、発時刻の電光案内、S ホーム内には、入る電車の行き先と途中停車3～5駅の電光表示、そして U、S 電車内では、車両別の座席対面方向に行き先と次停車3～5駅がミニ表示板（S には到着時刻付）で随時流れるシステムである。

また、トラム T は、停留所では、各系統別の到着予定の電光表示と車内では車両別（T は3両編成が多い）の座席対面方向に行き先と次停車3～5駅の電光表示が流れ、バス B には座席対面方向に行き先のほか次停車駅での他の系統交通機関と以降次停車3～5駅のミニ表示板〈photoF〉が順次案内される。

このようにいずれの交通機関利用時においても車両内や駅構内の字幕、字体はそれほど大きくはないが、要所での利用者への各車内外の交通案内表示板による次駅名、降車駅名や乗換、出口への誘導の仕方、その在り様で察知しやすく、特によく利用したトラムやバス車内では、案内放送と併せて案内表示を見ていれば、外を伺うことなく乗り過ぎの防止にも役に立ち、初乗り系統でもまごつくことなく過ごせた。

一方長距離発着を内蔵する中央駅（24 ホーム）は、ドイツの大都市に向かうベルリン、ハンブルグ、ケルン、ミュンヘンや、隣国ウィーンやパリへの ICE 列車がひっきりなしで、発着の様子を観ると、ヨーロッパに多い鉄道止まり折り返し式のせいか、到着列車への利用者は、直ちに乗り込む体様で、ものの15分前後で事前場内放送なしで時間発車となる。

日本の新幹線が車内清掃時間を挟み、待ち客への案内放送で乗車可とするのとは大違いで、列車自体が窓を含めて汚く、トイレ環境なんかもそのまま気にしないている。

なお各電車、バスへの乗車、降車はボデー側面に備え付の押しボタンがあり、完全停車で緑色ランプの点灯ボタンを押すと扉が開き、発車時は運転手が運転席モニター確認で扉を閉める仕組みである。

チケット（購入方法は、定期券が DB〈ドイツ鉄道〉旅行案内所窓口で扱う他は各駅、トラム停、バス停に配備された券売機）は、定期券購入でフランクフルト市内域網①をフルに使えて道中を楽しめた逸品。

これに倣って、JR と都営鉄や民営鉄がオール一体で役所構図クリアでシステム化して、65 歳以上は電車、バス全路線が東京 23 区内を終日使える 1 か月定期券発行の便宜を計ったら、その経済効果や如何に。

4人に一人となったこの年齢人、アクティブシニア達は、一体どのように反応転回するのか、DB が一手に運営管理①圏内 U、S、T、B の多種多様な交通網の仕組み違いからして、ここは愚問やめておこう。

## ＝多目的使用が自由自在の歩道敷・軌道敷も信号なしで歩道を兼ねる＝

路上駐車で溢れるドイツの街は、車道・歩道の一角が当たり前。路上駐車帯での特に縦列駐車空き枅への駐車入れの上手さは手慣れていて、歩道に乗り上げた駐車形は縦列よりは斜め駐車が多く、歩道の確保が狭いところも見かけたが、駐車帯の隙間・空間は大概が見当たらない、車一杯の車王国である。

また、徹底された車道・歩道への自転車専用道の配備。道路敷事態の幅が広く、車道内に自転車道、歩道内にも自転車道と並行に整備されたところもありで、歩道内への歩道と自転車道、メイン川両側散歩道の歩道・自転車道もはっきりと区別があり、散歩好き、自転車好き双方の往来時安心して散策できる。

それに広大な歩道敷き内では、ここに占めた食事テラスエリアも良く見られる光景。ドイツ人は朝、昼、夜を問わず外食好きで、特に夕食時は日が暮れるのが遅いので夕映え下で食事する人で溢れている。

一方電車道では、電車の通過の動きの合間をぬって歩行者が軌道敷を渡る<photoG>のは当たり前。歩道から電停利用の歩きも日常茶飯で、歩行者に対する車の一旦停止の配慮が行き届いている。



なお、よく知られたアウトバーン<自動車専用道の意>のことに触れると、何処に行こうと全域無料。走行は右側走行であるが、最左レーンで追い越ししたら直ちに隣の右レーンに変えて、最左レーンは開けるのが走行行為のルール。

日本で追い越し車線での我が道顔を見かけるが、これはご法度も甚だしいこと。

加えて普通乗用車は、当然のことながらドイツ製のベンツ、アウディ、フォルクスワーゲンが大半で日本では見かけないデザイン車が溢れ、トヨタ、日産、ホンダ、三菱、マツダ、スバル、スズキなど少ない中にもこれら日本車を見かけるが、デザインは日本国内で見かけるものとは違うように見える。

## ＝日本では見かけない道路工事の様子＝

ここドイツでの道路交差点での歩道を含むプラッツ（広場）の改良工事中の状景を見かけたが、交差点へ向かう歩道が工事区域に差し掛かると、行き止まりとなり、ここへはバリケード（夜光式でもなく夜間注意点灯式でもない）が乱雑に車道にはみ出して並べられ、通行者への誘導がなく車道を歩いて行くしかないのに人は平気、交通整理要員無人の仮設材配置<photoH>での工事には驚いた。

日本では、例え道路上に作業用車両を置いただけでも、通行者に対する交通要員旗振りでの安全誘導、いかなる道路工事も事前に道路管理者への歩車道占用と所轄警察署への道路使用での規制要領等を整えた両協議書の提出で OK が出ないと工事に着手できないが、工事エリアの仮設対策に関しての法律規定は過剰なのか、人、車交通の安全策無視でお構いなしとは法律重視の国らしからぬ見識にあきれた。了



〈駅構内のUバーン系統別案内表示〉 E

当駅の黄色被せに全区間の駅名が表示されていて系統選択、起点終点、利用目的駅が一目瞭然である

案内は真上が起点駅、真下が終点駅で、黄色の左側には囲み↓が付してあり、当駅からの行き先駅が判る



〈バス内の案内表示板〉 F

真上は次停車駅で次行は利用可の交通機関系統で以下の行は順次向かう停車駅の表示で、Sバーンには↓のところに到着時刻が表示され降車駅の留意が目につき、真下は系統番号と行き先方面案内である



〈トラム軌道敷内の歩行者の様子〉 G

上下線トラム間の合間をぬって乗換で渡り歩く人達

系統トラム到着予定の電光表示がかすかに見える



〈工事中の交差点での仮設材の設置状況〉 H

バリケードで歩道は遮断され車道内にもはみ出して人の姿はないが車道内歩行でも平然な様である